

# たねまきアクト

①KCUAの周辺に広がる  
創造活動の現在形

07

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

ZINE



## 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAとは

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAは、2010年春、中京区堀川御池に京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴い、その敷地内南側に建てられたギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）内に設立された京都市立芸術大学のサテライトギャラリーです。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。

当ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間約10本の展覧会を開催しています。そのほか、国内外で活躍するアーティストを講師に迎えた若手アーティスト対象のワークショップや京都市立芸術大学移転整備プロジェクト「still moving」の実施など、展覧会だけでなく多岐にわたる活動を実施しています。

## COVER PHOTOS:

### 京都市立芸術大学移転整備プロジェクト

#### ジェン・ポーによるワークショップ

#### 「EcoFuturesSuujin」

大学移転という次なる大きな変化を受け入れようとする崇仁地域を舞台に、アーティストのジェン・ポーと、今後もこの地域に関わっていくことになるであろう、さまざまな専門を持つ人々によって行われた、より良き生態学的未来、全ての種の生物における平等をめぐるワークショップ。

(→ pp. 32-35)

Photos by Toshie Kusamoto

(cover, p. 02, pp. 32-35, back cover)

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA ZINE

# たねまきアクア

07

## Contents

4-11 **STUDIO VISIT @KCUA** — 長坂有希「起点としてのニュータウン」

12-22 **REPORT @KCUA** — 「still moving library」

23-27 **PREVIEW @KCUA** — 「京芸 transmit program 2020」

28-29 **SCHEDULE @KCUA 2020.04-2021.03**

30-31 **VOICE @KCUA** — 松本久木「ソウテイ」

32-35 **WORKSHOP @KCUA** — ジェン・ポー「EcoFuturesSuujin」

## たねまきアクア

たねまきアクアは、@KCUAとその周辺に広がる創造活動の現在形、クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です。

(不定期発行、無料)







長坂有希

Aki Nagasaka



## 起点としてのニュータウン

@KCUAスタッフがさまざまなアーティストのスタジオを訪問し、スタジオの様子や制作の背景にあることを探るコーナー「STUDIO VISIT @KCUA」。今回は、今秋@KCUAで実施予定の京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展に向けてプロジェクトを始動した長坂有希さんが生まれ育った大阪府堺市の泉北ニュータウンを訪ねました。

国内外の様々な場所を巡って展覧会やアートプロジェクトを行う長坂さんは、固定のスタジオを持たず、移動の途中や旅の先々で制作しています。ニュータウンの公園や団地、よく作業場所として利用しているカフェを移動しながら、幼少の頃の記憶から美術家になるまでについて、お話を伺いました。

05

### RELATED EXHIBITION

京都市立芸術大学芸術資料館  
収蔵品活用展（タイトル未定）

2020年9月12日（土）-10月25日（日）  
大学が有する芸術資料の創造的な活用を目指す実験的プロジェクト。これまでに「移動する物質——ニューギニア民族資料」（2017）、田村友一郎「叫び声／Hell Scream」（2018）、「still moving library」（2019、pp. 12-22 参照）の3企画を実施。今年度は長坂有希、横内賢太郎を企画協力作家に迎え、アーティストが異文化の中で活動することをテーマに、芸術資料館収蔵品を用いながら現代のアートワールドとその未来について考察する。



## 整えられた公園と

### 不気味なはにわ

出身を尋ねられた時には「ニュータウンの出身です」と答えます。高校3年生で地元を離れてアメリカに留学したので、私にとっては大阪ではなく泉北ニュータウンこそが原風景だからです。私が住んでいたのはタウンハウスと呼ばれる集合住宅でした。強く記憶に残っているのは、子どもの頃によく遊んだ近所の大蓮公園の一隅にある「はにわ広場」です。綺麗に整えられたニュータウンに、突如として得体の知れない不気味なはにわが現れる。まるで公園の中に時空が歪んでいるスポットがあるようで、子供の頃は怖くて足を踏み入れるのに勇気がいりました。



### ずっと抜け出したかったニュータウンの環境

自分の育った環境にはずっと違和感を感じていました。反抗期だったからなのかもしれませんが、自分のいる場所が狭く限られている気がして、とにかく離れたかった。ニュータウンは人工的に作られた、歴史のない街だと思っていました。両親は広島と島根の故郷を離れて大阪にやって来て家を買ったので、自分の家族とこの土地とのつながりが見出せないことも嫌でした。



同世代でほぼ同じ所得層のサラリーマン家族の子どもが集まり、平穩だけどどこかしっくりこなかった小・中学校。退屈な進学校だった高等学校。決められたルールの上をそのまま歩むことに反発を感じ、かと言って具体的に学びたいことも思い浮かばず悩んでいました。そんな時、交換留学をした友人の話を聞いてすぐに留学を決めました。期間は一年間だけでしたが、とにかく当時の自分を取りまく環境から脱出することが大事だったのです。



### 衝撃だらけのアメリカ留学

留学先のテキサスはメキシコとの国境に面しており、飛行機から見下ろすと空軍基地が並んでいて、ニュータウンの街並みとはまったく違っていました。滞在先は治安の悪い地区にあり、家の窓には鉄格子がはめられ、基本的に外を歩くのはダメ。高校の入り口には探知機が備えられていて危険なものを持っていないかを毎朝チェックされます。通学鞆は中身が見えるように透明なビニール製リュックサックでした。体育館の更衣室では同級生がマリファナの草を食べていて、吸うと匂いでばれるからそのまま食べるんだと言う。給食は砂糖たっぷりシナモンロール、タコス、フライ

ドポットに、飲み物はソーダかミルク。生徒の誰かが妊娠したという話題も日常茶飯事でした。住民はヒスパニック系が大半で、白人やブラック系、アジア系もいて、家庭によって言語も宗教もさまざま。自分はなんて画一的なニュータウン育ちの良い子だったんだと、ものすごいカルチャーショックを受けました。

言葉を一から学ぶのも、人間関係やコミュニティをゼロから築くのも大変だったけど楽しかった。服装も化粧も完全に真似をして、ショートパンツを履いて、ありえないくらい濃い化粧をしていました。プロムと呼ばれるダンスパーティーには二人組じゃないと行けないので、誘ってもらうためには友達を作らなければと必死でした。自己が確立される前だったので、コピーすることに違和感はなく、大学の途中で「あれ？」と感じる時期がくるまではカメレオンのようでした。

英語とアメリカ史の授業は必須でしたが、最初は英語が分からないので、体育や料理、美術の授業を選択しました。美術の授業で模写をした時に、私の絵を周りごととても褒めてくれたんです。自分でもそのことに驚いたし、それまで言語面で欠けていると感じていた自分の能力が補われたようで、自己存在意義を高めてくれるきっかけとなりました。

## アクシデントがきっかけで

### 建築から美術の道へ

アメリカでの暮らしが楽しかったので、そのままアメリカの大学に行こうと思いましたが、何を学ぶかを考えないといけない。5歳の頃からずっと建築家になりたいという漠然とした夢がありました。自分で作った瞑想部屋のような居心地の良い空間で過ごしたいという願望をずっと持っていました。また、小学生の頃に転校してきた同級生の女の子が、建築家をしているお父さんが設計した一軒家に住んでいたことで建築家という職業への夢が広がった記憶があります。

入学してからの2年間は建築学部に進むための基礎科目を取っているつもりでいました。しかし、その手続き時に、建築学部だけは他の学部とは違い、一年次から建築学部の専門科目を取らなければならないことが判明し、建築学部に進むことができませんでした。

落ち込む私に、美術と生物学を専攻して建築家になった友人が「基礎は同じだから、美術をやれば良いんじゃない」と助言をしてくれました。そこで、残りの二年間は美術を学んで、それでも建築に進みたかったら大学院で建築を専攻すれば良いと考え直しました。これは私にとってとんでもないアクシデントでした。肯定的に人生を捉え直し



て、ようやく美術家になる覚悟ができたのは去年くらいです。

そんな経緯もあり、初期の作品ではル・コルビュジエやブルーノ・タウトなど建築にまつわるものが多いです。インスタレーション作品を作り始めたのも、空間を作りたかったから。その後も建築への興味は持ち続けていたので、大学卒業後はベルリンの建築事務所で一年間働いたり、紙による実寸大の建築物を撮影した構成写真で知られる現代美術家のトーマス・デマンドに誘われて、実際の建築プロジェクトにリサーチアシスタントとして関わったりしました。



08

09

## 震災と日本への帰国

その後、フランクフルトの大学院に進み、海外の生活に適応しながら楽しく暮らしていたのですが、2011年の東日本大震災を転機として帰国を考えるようになりました。日本では刻一刻と状況が変わる一方で、私はすごく離れた安全な環境でインターネットのニュースを見ている。それらが自分とあまりにも関わりがないことに強い危機感を覚えました。それまでは海外で外国人として、社会から少し離れて作品を作るような距離感が心地良かったのですが、30代になるにつれて社会ともっと関係性を持った方が良いのではと考えるようになりました。自分は社会とどう関係性を持ち、なぜこの作品を作るのか。これから日本がものすごく変わるかもしれないと感じた時、何らかの形でその中にいたいと思ったのです。



《木：これから起こることに  
出会うために / Trees: Audition for  
a Drama still to Happen》

秋田での滞在制作で長坂は、江戸時代後期の紀行家、博物学者、本草家である菅江真澄と彼が描き残した「木」の図絵に着目し、「写す」という行為を介して、菅江と彼が描いた木に接近しようと試みた。写すという行為は、菅江が木に向けていた視線や姿勢を自身の中に取り入れ、描かれた木々について理解を深めるための行為であると同時に、印象や解釈の「ずれ」を生み出す可能性をはらむ行為でもある。長坂は意識的に「ずれ」と向き合いながら作品制作を行うことで、これから起こるはずのことに会うための空隙を開こうと試みた。

Exhibition view of  
“木：これから起こることに会うために /  
Trees: Audition for a Drama still to Happen”  
at BIYONG POINT, 2019  
©Kenichi Hagiwara

## 日本の社会やシステムに戻る手段としての 文化庁の海外研修制度

17年間ほど日本を離れていたため、大人としての社会経験もなく、アートのネットワークも全然ない。そこで、文化庁の海外研修制度に目をつけました。この制度を活かして、日本の社会やシステムとの接点を作ってから日本に帰ろうと考えました。その頃はモノにまつわる背景をリサーチする中で物語を構想するという作風でしたが、英語ほどドイツ語を読めるわけではなく、図書館に山ほど文献があっても十分には活用できませんでした。でも、ロンドンなら英語で読みたいだけ文献が読めます。まさにアーカイブの国とも言えるイギリスで、帝国主義の歴史に焦点をあてたりサーチに専念したいと考え、受け入れ先としてヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の国立美術図書館を選びました。ロンドンでは、世界中の色々な所からモノが集められ、色々な人が来ていて、色々なエネルギーが渦巻いています。そんな街で、モノや人を介して時空の旅に出るプロジェクトをしたいと考えました。





Exhibition view of  
"HER/HISTORY" at 岸和田市立自泉会館, 2020  
©Takuma Uematsu

### 現在の制作につながるロンドンでの体験

ロンドンでは街や博物館、美術館などを巡る時にはあえてキャプションや解説を読みませんでした。偶然に出会って惹かれたものを感覚的に選び、そこから多角的にリサーチを広げていきました。その方がそれまで気がつかなかった興味のあることが見つかるからです。

ロンドンでは文明や帝国、すなわち人間が生み出したものについて考えていたので、近年の作品ではあえて人間の文明や文化に焦点をあてない作品の制作もしています。それはロンドンの経験があったからこそバランスが取れるものです。ロンドンでの一年間という短い期間は、これからの活動の種となるものを集めていた時期でした。そこから集まってきた気になるものたちを、今も一つ一つ調べながら発表していて、その頃に始めたプロジェクトは今でもずっと継続しています。

《手で掴み、形作ったものはその途中で崩れ始めた。最後に痕跡は残るのだろうか。02\_ライオン》  
ロンドンの大英博物館に所蔵されているライオンの彫刻との出会いがきっかけとなり、今は目を失い、盲目のライオンの彫刻がかつて見ていた風景を探す旅に出かけることになる。旅の途中で中東から

の紛争難民との遭遇や、かつてライオンが置かれていた土地に住む人々との出会いにより、旅は予期していなかった方向に向かい始める。過去と現在の出来事の狭間で翻弄されながらも旅を続けるなかで、歴史の中で繰り返されてきた事象や、人が持つ不変的な習性や欲望が浮かびあがってくる。

### タウトのおかげで解けたニュータウンの呪縛

文明や歴史に関心を持ったのは、歴史が浅く、何世代も同じ土地で畑を営み続けるような血や土地のつながりがないニュータウンに違和感を持ちながら住んでいたということが影響しているのかもしれない。でも、ブルーノ・タウトにまつわるプロジェクト《Project T, T for Taut.》を通して、ニュータウンという概念はイギリスの文化人やタウトから始まり、世界中に飛び火したという思想の流れがあることを理解しました。当時の世界状況に対応するためにタウトが人々のことを思いながら作ったニュータウンは、アメリカに波及し、日本にも形を変えて取り入れられてきた。その一つとして、私が住んでいたニュータウンができたと考え、思想的に辿れるルーツがあるんだと感じて、やっとニュータウンの呪縛から解放されました。そのため、いまではニュータウンをベースに活動することに嫌悪感はありません。家族とのつながりもあり、ここは拠点というよりも帰ってくる場所、そしてまた旅立つ場所だと捉えています。



Exhibition view of "Signs Taken in Wonder" at  
The MAK - Austrian Museum of Applied Arts/Contemporary Art, 2013  
©Katrín Wißkirchen, The MAK

### 《Project T, T for Taut.》

ドイツ人の建築家ブルーノ・タウトと彼が晩年を過ごしたイスタンブールの自邸を軸に、タウトが使った素材や設計した空間の物理的性質を探りながら、彼の着想や作品、移動歴を辿ることを通して、タウトが見据えていたビジョンとは、そしてそれをどう次世代につなげるかについて問いかけるプロジェクト。タウトのアイデアの影響を受けて建設された日本のニュータウンで育った長坂にとっては、自身のアイデンティティ形成がより大きな歴史や国際的な潮流と関係していたことを探る試みとなった。

#### 長坂有希 Aki Nagasaka

1980年大阪府生まれ。テキサス州立大学芸術学部卒業、国立造形美術大学シュテューデルシュレー・フランクフルト修了。2012年文化庁新進芸術家海外研修制度によりロンドンに滞在。リサーチとストーリーテリングを制作の主軸とし、遭遇した事象の文化、歴史的意義や背景の理解と、作者の記憶や体験が混じりあう点に浮か

び上がるものを、様々な媒体をつかい表現している。主な展覧会に「予兆の輪郭」(TOKAS本郷、2019年)、「Quatro Elementos」(ポルト市立美術館、2017年)、「マテリアルとメカニズム」(国際芸術センター青森、2014年)、「Signs Taken in Wonder」(オーストリア応用美術・現代美術館 MAK、2013年)など。

# still moving library

書籍・情報・人の集まる場所、図書館。  
2023年に京都市立芸術大学が移転を予定している新キャンパスの建物のうち、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAの入る棟では、図書館がその中心となっています。大きく開かれた吹き抜けのある図書館の周りには、さまざまな専攻や機関が配置されており、多様な出会いと連携が生まれることが期待されています。

図書館とは、いくつもの資料やアーカイブが集積され、それらをめぐって人々が集う場所です。本を読みに来る人、静かな場所を求めてやって来る人、イベントや講座に参加するために来る人、そして図書館で働く人々も、この場に集まった情報を選び取り、それぞれの形で活用します。これらは全て、図書館が有する有形・無形を問わないアーカイブを「再編集」する作業だと言えましょう。「still moving library」は、書籍をめぐるさまざまな「再編集」のかたちから、図書館という場所の活用について考えるための期間限定のライブラリープロジェクトです。



本づくり

- ・受付カウンターで表紙カバーを受けとる
- ・会場のあちこちに配置されているカードの中から、お気に入りのカードを集める
- ・ライブラリー内で見たもの、読んだことを、カードにメモする
- ・本づくり専用デスクに置いてある綴じ具でカードを綴じると、自分だけの本が完成！



- ・本棚からお気に入りの本を選ぶ
- ・「本棚する」ための場所を選ぶ
- ・「本棚する」ための専用カードに必要事項を記入する
- ・自分が作った本棚の記録写真を撮る
- ・記録写真をカードに貼る
- ・過去の「本棚する」の記録とともにアーカイブとして蓄積されていく

本棚する



富本憲吉  
「わが陶器造り」

芸術資源研究センターの研究成果書籍である、富本憲吉『わが陶器造り』（2019年3月出版）で参照されたものなど、この本の周囲にあるものを芸術資料館収蔵品などから選んだ「再編集」のかたち。  
 一出品作品：尾形乾山「色絵槍梅文水指」、野々村仁清「瀬戸袖筒水指」、富本憲吉「赤絵金銀彩羊歯文様壺（未完）」



美術をめぐるアーカイブを「再編集」した映像作品を上映。

- ・ 展覧会を記録・再編集する：  
田村友一郎「叫び声／Hell Scream」
- ・ イベントを記録・再編集する：  
西尾美也「感覚の洗濯」
- ・ 作品を記録・再編集する：  
久門剛史作品映像アーカイブ



「still moving library」の中で、2018年度のアーカイブを書籍化するプロセスを公開し、随時デザイナーが滞在して作業やミーティングを実施。

図書館という場所の可能性について考えるために、図書館にまつわる多様な取り組みをしている榊原充大さん（建築家／リサーチャー）、乾聡一郎さん（奈良県立図書情報館 図書・公文書課課長）、槻橋修さん（建築家／ティ・ハウス建築設計事務所主宰／神戸大学工学部建築学科准教授）をお招きしてお話を伺いました。

## 「still moving library: これからの図書館」トークレポート



日時：2019年11月3日（日・祝）  
15:00-16:30

榊原：2008年に建築のリサーチ組織であるRADを開始し、2019年に公共施設の計画・運営を支援する株式会社都市機能計画室を設立しました。どちらの業務でもどういうわけか図書館に関わることが多いです。例えば、大阪府泉大津市の商業施設のワンフロアを図書館に変えるプロジェクトにも関わっています。地域の若者や建築を学ぶ学生とチームを組み、現地を歩いて発見を共有し、街を見る解像度を高めた上で設計を行うことを重視しています。

他にもあかし市民図書館ではリサーチのヒアリングツールを起点に「たこ文庫」という16枚のカードを作りました。そこには「途中で読むのを諦めた一冊」「捨てられない一冊」などのお話が書かれています。その後、ノベルティができたり、多様な場で使われたり、使い方の動画が作られた

り、継続して活用されています。デザインした後、にどう展開するかが大事だと実感しました。

乾：私は2005年に奈良県立図書情報館が開館するまでの6年間、主に資料整備や公文書館関係の仕事などソフト面を担当していました。開館後は図書館の情報発信や交流促進を活性化させることを目指し、他機関等と多様な連携を進め、企画展示やフォーラムなどのイベントを企画・開催してきました。

現代の生活で図書館が必要という人は少ないです。奈良県立図書情報館の年間利用者数は約55万人で、奈良県の人口は約138万人ですので、実際に来ている割合は10%に満たないと思います。ですので、図書館にこない人たちにどうアプローチするかということをずっと考えてきました。これまで図書館のサービスとは求める人に求める情





「たこ文庫」の取り組み  
Photos by\_Natsumi Kinugasa

報を与えることだと言われてきましたが、それもありですが、図書館に関心のない人に振り向いてもらうためには、ニーズに応えるのではなくニーズを創り出さないといけない。最近課題解決型図書館が流行りです。それを否定はしませんが、僕自身は、図書館は課題解決よりも「こんな情報や人に出会いたかった」と思ってもらえるような場所でありたいと考えています。

図書館には、「図書館はこのような場所である」というような強い固定観念があると思いますが、あらゆる分野の本があり誰が来てもよい無料の施設ということを考えると、図書館という場所も変幻自在な場でないといけない。何かの代わりにもなるし何かのためにもなる、そんな図書館の場の可能性を考えていく必要があります。

また、「公共と個人」から「公・共・個人」へ視点を変えたい。日本は明治時代以降「共」の部分すべて行政が担ってきたので公共図書館と呼ばれがちですが、僕はあえて公立図書館と呼びたいです。公共と個人の関係では、要望とクレームしか生まれませんから。そうではなく、行政と個人の間で共生空間をうまく作り出して、公と個人がお互いにフォローする／される実験場として図書館を考えたい。自分の中でこのような課題を持ちつつ、実際に何ができるかを考えて様々な試み

を行ってきました。

「自分の仕事を考える3日間」は働き方研究家の西村佳哲さんと企画したフォーラムです。3回目まではゲストを招いた半日だけのイベントでしたが、4回目以降は正月明けの3日間連続のイベントになりました。その参加者たちが自主的に始めたのが「シゴトヒト」フォーラムと「これからはじまり」フォーラムです。参加者が入れ替わりながら、我々もフォローしますが、我々もフォローされている感じでした。そんな流れの中で、何かやってみたいという人たちが出てきました。例えば、2011年の震災直後に公立図書館として初めて実施したビブリオバトルは、そんな人たちが緩く集まり、ビブリオバトル部なるグループをつくり、運営されていました。今年の3月に100回目を迎えましたが、我々職員は椅子並べとチラシの印刷だけで、あとは集まってきた人たちがする。メンバーによる部誌も作られ、例えばイラストレーターのスキルのある部員が講師になり、部員同士で教え合う講習会が勝手に始まりました。自分たちで講師を呼んで本と空間がテーマの「本をめぐる冒険」というプロジェクトができてイベントを企画・開催したり……自主的な企画がどんどん発生していきました。

ところで、コミュニティは基本的に閉じた構造



シゴトヒトフォーラムの様子  
提供：奈良県立図書情報館

を持つので、開き続けるためにはどうしたらよいかという課題があります。「コミュニティデザイン」という言葉が流行りましたが、図書館はコミュニティをデザインするというより、学びを開き、人を開き、他者と出会う場だと思います。コミュニティというのは同質性が高く、同じ関心を持つ人が集まってきます。そうではなく、見知らぬ人同士が他者として出会い、なんとなく一つのことをするけれど、コミュニティとしては閉じない。コモンズデザインと言った方がよいかもかもしれません。そういう場づくりを、緩く長くゆっくり育むことができればと思います。

榎橋：公共の図書館はコモンズであると同時にサードプレイス、すなわち個人の視点だと家でも職場でも学校でもないもう一つの場所であり、社会の視点だと共有された入会地的な場所です。図書館では一人ひとりが本を選ぶことにより別の世界につながっていて、館内に100人も200人もいるというのは、他の施設にはなかなかなく、非常に特殊なコモンズの形態です。

私が図書館に関わった仕事として、岩手県大槌町の大槌メディアコモンズがあります。震災で街が大きく被災し、小さな図書室が失われてしまったため、復興計画として図書館を新しく作る話がもちあがりました。2013年から2015年の2年間

にわたり、どのような図書館を作るか、どのように計画すべきかを協議する基本構想に携わりました。設計には至りませんでした。この構想を経て図書館が完成しました。その前身のプロジェクトでは津波で失われる前の街並みを学生とジオラマ模型で再現し、現地に模型を持って行って、地域の人から聞いたさまざまな思い出を旗を立ててプロットしました。これまでに約50カ所で実施しました。2013年に大槌町でこのワークショップを行ったことがきっかけとなり、大槌メディアコモンズ検討委員会が設立され、委員会の運営と青図を描く仕事をしました。

ワークショップで思い出を聞く中で、大槌町には自然湧水による井戸が無数にあると知りました。家の裏の井戸が井戸端会議の場所になっていて、屋外で茶会などのコミュニティ活動が盛んな所だった。そこから単なる図書館ではなく、大槌の新しい井戸端として「文化の井戸端」をキーワードに作ろうとなりました。図書館を核にギャラリーやホールでの活動、アウトリーチ、自主活動などが周りにあって、連続的につながっているのがメディアコモンズだという理想形をみんなで考えました。ワークショップで作った模型がメイソンホールに置かれ、まずは模型の周りで以前の街と新しい街を比べて話してから次の活動に行くど



いう流れです。

また、神戸市立北神図書館も設計し、今年4月に開館しました。駅前の商業施設のワンフロアに図書館を作りました。ブックファーム（本の畑）がコンセプトで、本から得られる豊かなものを作物に喩えており、美味しいものにみんなが集い出会える場所として考えました。スーパーマーケットと駐車場の間にあるので、買い物前後に寄ったり、図書館で子供を遊ばせながら買い物ができます。図書館が目的ではない人も図書館に触れ合える設計にしました。

入り口の外にはベンチ型の椅子を置き、お弁当を食べてもよい緩い空間にして、借りた本を読んだから帰ることもできる仕組みを考えました。仕切りがガラスなので中が見えます。乾さんがおっしゃられたような本の活動が育つといいなと思い、小さな本棚をベンチに埋め込みました。ガラスで囲まれた子供向けのお話部屋には手前に待合コーナーがあり、子供が遊んでいる間に雑誌を見たりできます。本棚には穴が空いており、閲覧室から学習室の奥まで見通せて、気配を感じられます。学習室で若者が勉強している姿が見えることが地域の活力につながり、この地域はまだ大丈夫と思える場所になればと思っています。

図書館には多様な人が次々に来るので、ソファ

で足をひっかけないように目に入りやすい位置に移動させるなど、事故が起きないように常日頃工夫しています。みんなで気持ちよい空間にしておくというcommonsのマネジメントの部分にハード面で直接サポートすることは難しいですが、運営者と利用者が相互に気持ちよくしていく関係が生まれればと思って作りました。地域の図書館というのは知的で文化的な生涯教育の場所でもあるので、利用者がどう振舞っていくかが大事です。

榊原：大きな情報館的データベースとして信頼できる図書館と、commonsとしての地域図書館という区分けで、異なる価値の提供を想定することも、これからの図書館を考える上で重要です。一方で、公共施設として安全性が担保されているべき、働いている人が動きやすくあるべきなど、サービス提供側の論理が優先されることも多い中で、利用者が図書館を自分たちの場所として育てていくために、それぞれ設計と運営の立場からアイデアをお伺いしたいです。

榊橋：北神図書館の外にある廊下のベンチで市民活動をしてもらえたらとか、寄贈本で書架に回せず捨てる本をリサイクルできるように、持って帰ってよい本棚を作れたらという提案を神戸市にしました。そんな場所を図書館が持つことはありえない話ではないですが、少人数での運営なので、

市から一方的に業務に加えるのは難しい。運営の仕組みにおける自由度の課題はまだ中途段階ですが、可能性を示すことで、何かしたいと市民が言い出すかもしれない。そんなチャンスを設計に忍ばせたいと思いました。

乾：利用者が自律的に行う活動は、館がきっかけを作る場合もありますが、その後が感じがらめにしていないことが大事です。管理ではなくフォローする存在でいられるか。できるだけ手を出さず、館の運営にコミットメントしてもらえる関係づくりができればと思っています。

京都駅の近くに移転する京都市立芸術大学は、駅のコンコースのようなイメージです。広場や公園ではなく、目的の違う人々がすれ違い、立ち止まり少し交流しては離れ、出会っては別れてという空間です。そんな空間がないとまちは成り立ちません。いかに目の届かないところを小さくするかという運営面の条件もありますが、悪いことをしない雰囲気は利用者がつくらないとうまくいかない。こういう雰囲気でありたいという声を利用者と一緒に形にできるといいですね。

榊原：芸術大学の図書館は制作のための拠点でもあります。クリエイティブな状況における図書館の役割や可能性について提言はあります。

榊橋：桂英史さんがアルス・グロッターという概

念を提案していますが、グロッターというのはイタリアの地下墓地で、なんでもかんでも集めたぐちゃぐちゃな状態です。図書館やミュージアムに分化する前の状態とも言えます。芸術大学は、価値が生まれ出づる前のいろんなものがぐちゃぐちゃにある洞窟のようなもの。それはコンコースでもあり、まずみんなが集まり、分化する前の場所です。誰もがアクセスできる駅の近くにあり、大学の活動が一般の人に触れる場所であり、そこから出会いが始まり各学科や分野へと移って新しい創造につながる場所なので、学内で最もcommons的な場所です。芸大ならではのアートcommonsが見えてくるといいですね。

榊原：本の収蔵という機能を超えて、図書館のアイデンティティはどのように変わっていくのでしょうか。

乾：図書館の特徴は、どんなメディアも取り込んでしまえることです。たまたま紙媒体で始まりましたが、もとは何でもありだったはず。例えば音楽と美術が融合したり、別個に作ったりしたものや、制作のために用いた資料をどんどんアーカイブしていくとか、それが本と結びつくとか。何でもありを再編集して提供できるのが、図書館の強みですので、既存のイメージが脱構築され、再構築されると面白いと思います。







## 書籍出品者

### 京都市立芸術大学教員：

石原友明（美術学部油画専攻教授）  
岡田加津子（音楽学部作曲専攻教授）  
奥村美佳（美術学部日本画専攻教授）  
小山田 徹（美術学部彫刻専攻教授）  
初原 悟（音楽学部ピアノ専攻教授）  
竹内有一（日本伝統音楽研究センター教授）  
玉井尚彦（美術学部共通教育准教授）  
津崎 実（音楽学部音楽学専攻教授）  
礪波恵昭（美術学部総合芸術学科教授）  
中原浩大（美術学部彫刻専攻教授）

### 「still moving library」プロジェクトメンバー：

岸本光大（ギャラリー@KCUA 学芸員）  
榎原充大（建築家/リサーチャー）  
佐藤知久（芸術資源研究センター教授）  
仲村健太郎（デザイナー/Studio Kentaro Nakamura）  
西尾咲子（ギャラリー@KCUA 学芸員）  
藤田瑞穂（ギャラリー@KCUA チーフキュレーター/  
プログラムディレクター）  
松本久木（デザイナー/有限会社松本工房）  
森野彰人（美術学部陶磁器専攻教授）

### 関連イベント出演者：

尾中俊介（詩人・デザイナー/カラマリ・インク）

会期：2019年9月28日（土）-11月3日（日・祝）

## 京芸

PREVIEW @KCUA

# transmit program 2020

23

「京芸 transmit program」は京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトです。アーティストの活動場所として日本でも1、2を争う都市京都における、期待の新星を紹介するシリーズとして、毎年春に開催しています。

今年度は、美術史を参照しながら、自作の装置や身体との関わりから「美術に特化した身体」のあり方を模索しつつ制作する菊池和晃（構想設計）、人間の生、性、愛について、ペインティングを起点としてさまざまなメディアを用い躍動的に表現しようとする小嶋晶（油画）、さまざまな文化的背景を持つ装飾的な新旧混交のモチーフを陶により象り、それらの再構築と再解釈を試みる西久松友花（陶磁器）、人の行動がその場の空間、環境などにもたらす変化や現象をパフォーマンスやインスタレーションで表現する宮木亜菜（彫刻）の4名が出演します。それぞれの瑞々しく力強い表現にご注目ください。（スケジュール詳細はp. 28参照）



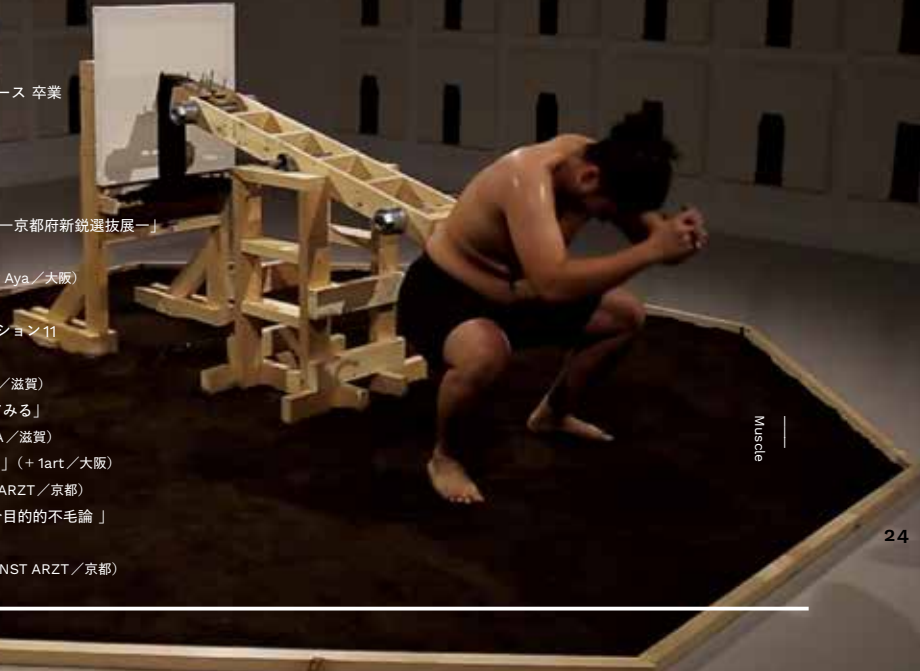


**菊池和晃**  
Kazuaki Kikuchi

- 1993 京都府生まれ
- 2016 成安造形大学美術領域現代アートコース 卒業
- 2018 京都市立芸術大学大学院美術研究科  
修士課程絵画専攻構想設計 修了

主な展覧会・受賞歴など

- 2020 「Kyoto Art for Tomorrow 2020 一京都府新鋭選抜展一」  
優秀賞 (京都文化博物館/京都)
- 2019 個展「Muscle」(The Third Gallery Aya / 大阪)  
「超暴力展」(山下ビル/愛知)
- 2018 秋の芸術月間セイアンアーツアテンション11  
「playing BODY player」  
(成安造形大学 ギャラリーアートサイト/滋賀)  
「以“身”伝心 からだから、はじめてみる」  
(ポーダレスアートミュージアムNO-MA/滋賀)  
「エイリアス——コレイガイノスベテ」(+1art/大阪)
- 2017 Vvk20 「ウォーホル美術」(KUNST ARZT/京都)  
若手芸術家支援企画1floor2017「合目的的不毛論」  
(神戸アートビレッジセンター/兵庫)
- 2016 菊池和晃+にしなつみ「KISS」(KUNST ARZT/京都)



24

Finding Anima



25

**小嶋 晶**  
Aki Kojima



京芸 transmit program 2020

大阪府生まれ

- 2002 関西医科大学附属看護専門学校 卒業
- 2016 大阪芸術大学通信教育部デザイン学科 卒業
- 2019 京都市立芸術大学大学院美術研究科  
修士課程絵画専攻油画 修了

主な展覧会・受賞歴など

- 2020 「第23回岡本太郎現代芸術賞展」  
(川崎市岡本太郎美術館/神奈川)  
「Kyoto Art for Tomorrow 2020 一京都府新鋭選抜展一」  
最優秀賞 (京都文化博物館/京都)
- 2019 ART OSAKA 2019 (ホテルグランヴィア大阪/大阪)  
阪急アートフェア Neo SEED (阪急うめだ本店/大阪)  
アートワードトーキョー丸の内2019  
(グランプリ受賞/行幸地下ギャラリー/東京)



西久松友花

Yuka Nishihisamatsu



- 1992 京都府生まれ  
2016 京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻 卒業  
2018 京都市立芸術大学大学院美術研究科  
修士課程工芸専攻陶磁器 修了

主な展覧会・受賞歴など

- 2019 創工会支援企画「新進作家五人展」(京都文化博物館/京都)  
「KOGEI Art Fair Kanazawa 2019」  
(KUMU KANAZAWA THE SHARE HOTELS/  
石川/2018にも出展)  
個展「輪ーリンー」(ギャラリーヒルゲート/京都)  
2018 「シブヤスタイル vol.12」  
(西武渋谷店/東京/vol.11にも出展)  
個展「祈りの飾り」(ギャラリー恵風/京都)  
「Kyoto Art for Tomorrow 2018 —京都府新鋭選抜展—」  
(京都文化博物館/京都/  
2017にも出展、NHK京都放送局賞)  
京都花鳥館賞奨学金 最優秀賞  
2017 「秋空に高くそびえる」(art space morgenrot/東京)  
「京展2016」(京都市美術館/京都)

コレクション

京都銀行/前田珈琲/京都紅谷/三井寺/中信美術館



宮木 亜菜

Ana Miyaki

- 1993 大阪府生まれ  
2016 京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻 卒業  
ロイヤル・カレッジ・オブ・アート  
パフォーマンス専攻 交換留学  
2018 京都市立芸術大学大学院美術研究科  
修士課程彫刻専攻 修了

主な展覧会・受賞歴など

- 2019 「山中suplexのみんと尼崎にいるあなた」  
(あまらぶアートラボ/兵庫)  
「かみこあにプロジェクト2019」(沖田面会場/秋田)  
2018 「ゲンビどこでも企画公募2018」  
(広島市現代美術館/広島)  
2017 「集団展示」(コーポ北加賀屋・千鳥文化B棟/大阪)  
「still moving 2017: 距離へのバトス—  
far away/so close」フロートとストック  
(元崇仁小学校/京都)  
2016 「通り抜けフープ」  
(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA/京都)  
2015 ALL NIGHT HAPS 「池の中でロクロー」  
(HAPS オフィス1階/京都)



# SCHEDULE @KCUA [2020.04-2021.03]

4月 APR.

5月 MAY.

6月 JUN.

7月 JUL.

8月 AUG.

9月 SEP.

10月 OCT.

11月 NOV.

12月 DEC.

1月 JAN.

2月 FEB.

3月 MAR.

4/4 (土) - 5/17 (日)

## 京芸 transmit program 2020

京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクト。第4弾となる本年度は、菊池和晃（構想設計）、小嶋晶（油画）、西久松友花（陶磁器）、宮木亜葉（彫刻）の4名を選出。



西久松友花《緋華飾 アケカショク》2019.

皆藤 齋 (Tight Intelligence  
(Violet belts and green cables) 2019)



5/30 (土) - 7/26 (日)

## Slow Culture

若手アーティストの実践を辿りながら現代の絵とその周辺を読み解いていく。さまざまなメディアからの複数の情報ストリームが意識に浸透する現代社会で、描くことによって生と向き合いながら世界を捉えようとする表現に注目する。

出展作家:磯村 暖、今井 麗、皆藤 齋、川田知志、木村翔馬、谷原菜摘子、谷本真理、永井麻友佳、NAZE、堀 奏太郎、松平莉奈、吉田桃子

8/8 (土) - 8/30 (日)

## Load na Dito Project (タイトル未定)

出展作家など: Load na Dito (平野真弓、マーク・サルバトス、ジェローム・ソリアーノ)、笠間弥路、ワークショップ(関連企画として実施予定) 参加者

8/8 (土) - 8/30 (日)

## おかんアートと現代美術を一緒に展示する企画展

出展作家: 青木陵子、新居光子、池内美絵、伊藤由紀、尾本節子、香坂司登美、下町レトロに首っ丈の会、集治千晶、中村協子、西村みどり、森田麻祐子、藤岡純子、藤田孝子、フジタマ、八木春香ほか



Gustafsson&Haapoja, Becoming, 2020, video still.

9/12 (土) - 10/25 (日)

## 京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展 (タイトル未定)

大学が有する芸術資料の創造的な活用を目指す実験的プロジェクト。今年度は長坂有希、横内賢太郎を企画協力作家に迎え、アーティストが異文化の中で活動することをテーマに、芸術資料館収蔵品を用いながら現代のアートワールドとその未来について考察する。

長坂有希(手で掴み、形作ったものはその途中で崩れ始めた。最後に痕跡は残るのだろうか。02\_ライオン) (「HER/HISTORY」展示風景、岸和田市立自泉会館、2020)

11/7 (土) - 11/23 (月・祝)

## パシエの音響彫刻 特別企画展 (仮)

12/1 (火) - 12/15 (火)

## 奥行きを感じる展 (仮)

1/30 (土) - 3/21 (日) (予定)

## グスタフソン&ハーポヤ展 (タイトル未定)

人間を中心とする世界観から生じる問題に焦点を当て、より包括的な社会概念への道を開くことを目指して大規模で長期的なプロジェクトに取り組むというフィンランド出身のビジュアルアーティスト、テリケ・ハーポヤと文筆家のローラ・グスタフソンによる学際的ユニットの個展を開催。

3/27 (土) - 4/11 (日)

## 堀口豊太

(本学美術学部教授)

## 退任記念展

最新情報は @KCUA ウェブサイトにてご確認ください

## ソウテイ

## 松本久木

古くから議論の絶えない問題として、いわゆる「ブックデザイン」を漢字でどう表記するかというものがあります。ある人は「装丁」、またある人は「装釘」、またまたある人はかたくなに「装幀」を使い、いやいや「装訂」が本元なんだと主張する人もいます。それ以外にも、「図書計画」「造本設計」「装幀意匠」「装本」などを使う人たちもいて、いまだ決着のつかないところです。

また今日では、インターネット上での宣伝・広報や電子書籍での出版が定着してきたので、パソコンや電子タブレットでの見栄えや読みやすさも考慮に入れてソウテイして欲しいとリクエストされることも多くなりました。もしかしたら今後、新たな「ソウテイ」表記が生まれるかもしれませんし、全く別の表記が取って代わることになるのかもしれませんが。ちなみに筆者は表記がいろいろであるかにはほとんど頓着がなく、入力変換の一番目

に出てきた漢字でいいや、ぐらいのこだわりの無さです。その代わり、とってはなんですが、同音異字の「想定」については少し思うところがありまして、筆者のソウテイ作業における密かな楽しみであり、かつ、ソウテイの形を決める重要な通過儀礼になっているように思います。

一般的にソウテイするにあたって想定することといえば、ターゲット層やボリュームゾーン、宣伝・広報の方法とのマッチング、内容・ソウテイを含めた総合的なトレンド感や同時代性の要不要などがあるかと思いますが、筆者の場合そんな重要なことはすつとばして、今作ろうとしている本がどんな場所・空間に在るのがこの本にとって幸せなんだろうと、シチュエーションをあれやこれやと想定（ほとんど夢想ですが）してみます。

オシャレなカフェの棚にインテリアの一部として置かれるのがいいのか、あるいは、読書家で多読な人の山積みされた積ん読本の山の上から4番目あたりに腰を据えるのがいいのか。図書館の閉架書庫の中でほとんどお声掛かりなくひっそりと時を過ごすのがいいのか、大手企業でバリバリに働く35歳ぐらいの女性会社員の本棚にまぎれこむのがいいのか。古本屋の平積みはどうだ、航海士のナイトテーブルはどうだ、探偵の胸ポケットはど

うだ、道ばたに捨てられているのも魅力的か、いや、中学生男子のベッドの下が最良の地だ、などなど。そうやってそれぞれの本にとってお似合いの場所や空間を想定して、そこに適したソウテイを考えてみるのが好きなのです。その想定行為を経ると、まだ見ぬ本であるにもかかわらず、既に著者や読者や出版社やソウテイ家から自由になって、ひとつの……なんとと言えばいいのか、独立した命あるひとつの存在として感じられ、敬意や気遣いや親しみや憂慮や、時には畏怖の念を抱いたりします。まだ何も出来ていないのに。

実際の作業に入ればソウテイはどこまでいっても技術の産物となります。ソウテイ家自身の意匠する技術はもちろんのこと、機械的な技術、手工業的な技術、そして今日では必須ともいえる情報技術などの集約と組み合わせの作業なので、その中身は具体的かつ合理的な方法の選択であり行使になります。おのずと想定する内容も変質し、より現実的・効果的・経済的で確度の高いものになっていかざるを得ません。解剖台の上に置かれたミシンとこうもりがさの不意の出会いのように美しいソウテイってどんなだろう、なんてバカなことは言っておれません。

けれど時に感じることは、ソウテイにおいての実際の

な判断や決定や実行には、夢想妄想といえるような想定や思考実験や夢物語みたいな暴発力（今つくりました）も必要ではないかと思うのです。なぜなら、形になったものの豊かさと強度は、形にならなかったものの豊かさと強度に比例するのだと感じられるのです。たとえそれが実現することがないと明白であっても、目に見えないものや人に正確に伝えることができないもの、あやふやだったり蒙昧だったりするなにかがたち。あるいは趣味嗜好に偏重した着想なども取り入れて何度も試行することが実際のソウテイに想定「外」の効果をもたらすのだらうと思います。本が物体としての本である必要性・優位性、そして読書体験としての予測不可能性はそこらへんにあると思うのです。

## 松本久木 Hisaki Matsumoto

出版者/グラフィックデザイナー/松本工房代表  
2007年より出版・組版・グラフィックデザインを主軸として活動を開始。クライアントは文化的・芸術的領域の団体や機関が多く、仕事内容は主に、芸術関連施設での展覧会やイベントのデザインワーク、演劇・古典芸能・ダンスなどの舞台芸術の広報デザイン、大学・研究所・文化施設の広報物及び出版物の制作、人文・芸術・アート分野の出版及び装丁などとなる。緻密かつ繊細でありながら大胆で強い印象を与えるヴィジュアルイメージの構築と、深いコンテクストを持った抽象性の高いデザインワークに定評がある。



# EcoFutures Suujin



@KCUAでは毎年、国際的に活躍する海外作家の創造と実践に触れる機会として、展覧会や実践的なワークショップ、レクチャーなどを実施しています。2019年度の招聘作家の一人であるジェン・ポーは、史実や社会現象についての緻密な調査をもとに、雑草をはじめとする植物と協働して未来を考察するための作品を手がけるアーティストです。

ジェンは2019年1月と3月に京都での滞在調査を行いました。さまざまな人々との対話を経て、京都市立芸術大学の移転という大きな変化を受け入れようとする崇仁地域の人々が動物や植物と密接に関係した職業に長く携わってきたこと、平等の観念を中心とした長きに渡る社会運動の歴史を持つこと、そして大学移転が、この地域のコミュニティ、景観、生

態系を大きく変化させるということに着目します。そして、2019年5月24日から26日の3日間にわたり、活動家、美術家、建築家、文化人類学者、歴史学者、生態学者など、さまざまな専門を持つ人々と共に、より良き生態学的未来、全ての種の生物における平等をめぐるワークショップ「EcoFuturesSuujin」を実施しました。

## 1日目

2019年5月24日 | Day1, May 24, 2019

(元崇仁小学校)

地域の中だけでは暮らしが成り立たない時代に  
どうすれば不平等を感じられるだろう？

How can we sense inequality  
when our life is no longer local?



水平社宣言を更新しようとする勇氣は  
どうすれば湧いてくるのだろうか？

How can we garner courage to update the manifesto?



どうすれば私たちが果たすべきもっと大きな責任について考えられるだろう？  
例えば作者の許可を得るといような小さな責任ではなく  
その作品制作が生態系に与える影響について…

How can we focus on larger responsibilities like the ecological impact of  
art production, instead of smaller responsibilities like authorial credits?

各参加者が30分間ずつ「平等」をテーマに講義を行う  
学びのセッションの日。個人的な経験、専門領域の両方  
から「平等」の概念を定義したプレゼンテーションと、  
それに応答する形のディスカッションが行われた。

京都市立芸術大学の新しいキャンパスに  
裸足のための道を作るのはどうだろうか？

Can we make a barefoot path in the new KCUA campus?



黒川岳さんがみんなに  
教えてくれたこと

「じぶんがふっと遠ざかる」の例

- ・ 水の中に入って水に包まれると  
水と溶け合いそうな感じがする

- ・ 枝に神さまが乗っていると教わった  
両手に持つと、どっちに乗っているんだろう？

- ・ 窓の外の樹々に目を向けて、ボーっとする  
あるいは、耳を澄ましたり、何かを想像してみる





1922年の全国水平社創立宣言の更新案を作成。

参加者一人ひとりが宣言文を起草する。

Each person develops a manifesto.

3人ずつグループに分かれて、話し合いながら宣言文を起草する。

Three persons form a group to discuss and develop a manifesto.

2つのグループに分かれて、話し合いながら宣言文を起草する。

1つ目のグループは1950年代、60年代、70年代生まれの参加者、

2つ目のグループは80年代と90年代生まれの参加者からなる。

Form two groups: those born in the 1950s, 60s, and 70, and those born in

the 1980s and 90s. Each group discuss and develop a manifesto.

ジェン・ポー (ZHENG Bo / 鄭波)

1974年北京生まれ、香港在住。アーティスト、研究者、文筆家として活動。地域の歴史についての緻密な調査から、政治的な史実、アーカイブなどの過去の事物の調査にそれら結びつけ、雑草などの植物と協働しながら未来について考察する作品で知られる。彼は良き人新世のために、生態学的な叡智を求めて修行中である。

RELATED EXHIBITION

ジェン・ポー 「Dao is in Weeds」

道在稗神 / 道 (タオ) は雑草に在り

2019年6月1日 (土) - 7月15日 (月・祝)

2日目

2019年5月25日 | Day 2, May 25, 2019

(京都一周トレイル西山コース)

ハイキングをしながら、他の生物や参加者と触れ合う日。途中、ジェンによってあらかじめ用意されていたいくつかの質問が手渡された。山道を歩きながら、ある時は2人組になって対話をしながら、またある時は一人ひとりバラバラになって、その問いについて考えた。



3日目

35

2019年5月26日 | Day 3, May 26, 2019

(元崇仁小学校)





京都市立芸術大学  
Kyoto City University of Arts

@KCUA



京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

T 604-0052 京都市中京区押油小路町238-1

地下鉄「二条城前」駅(2番出口)南東へ徒歩約3分

「堀川御池」バス停下車すぐ

TEL: 075-253-1509

<http://gallery.kcuu.ac.jp>

編集：藤田瑞穂、西尾咲子

編集補助：岸本光大

デザイン：Studio Kentaro Nakamura

発行：2020年3月31日

© 2020 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

